

益田ゆかりの作家たち

このたびの企画展では、石見出身で国内外で活躍する美術家3名の作品を紹介します。「めがね」というテーマとどんな関わりがあるのか、展覧会でぜひ確かめてください。



《春の予感》1993年 東京ステーションギャラリー蔵

大畑稔浩 (現代美術家) Ohata Toshihiro

1960年益田市生まれ。白日会会員。1988年、東京藝術大学卒業、第64回「白日会展」初出品で白日賞、文部大臣奨励賞('07年 内閣総理大臣賞)1990年、東京藝術大学大学院修了。1996年、宮尾登美子原作「天涯の花」挿絵担当、第1回「雪舟ますだ美術大賞展」招待。2001年「大畑稔浩展」(呉市立美術館主催)2006年~08年、東京藝術大学 非常講師 2012年、アートフェア東京にて個展など 個展、グループ展多数。パブリックコレクション、東京藝術大学、広島市立大学、ホキ美術館 他



本人からのコメント

この作品は、観ると描くという関係とリアリズムについて考え始めた頃の作品です。一見、冬の風景に見えますが、冬から夏までの風景が入っています。



《Noctis Labyrinth(夜の迷宮)》5点組のうち 2017年(写真は展示風景)

野村康生 (現代美術家) Nomura Yasuo

1979年益田市生まれ。益田高等学校卒業。2004年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。「高次元理論を二次元絵画で表現する」というテーマに取り組んでいる。2015年カブリ数物連携宇宙機構でのアーティスト・イン・レジデンスに参加。2016年理化学研究所 脳科学総合研究センターと共同企画を実施。主な展覧会は「VOCA展」(2018/上野の森美術館/東京)、個展「Dimensionism」(2017年/hgrpGALLERY/東京)など。平成30年度文化庁新進芸術家海外研修制度により渡米予定。



本人からのコメント

絵画は人々の知の積み重ねによって新しい表現が生まれ出されてきました。私が描き出そうとしている「高次元」は、絵画の新たな道標となる魅力的なモチーフだと感じています。

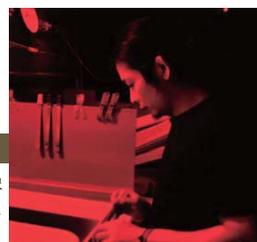


《a study for spacecolortime》2018年(写真は展示風景)

平川紀道 (現代美術家) Hirakawa Norimichi

1982年浜田市三隅町生まれ。益田高等学校卒業。コンピュータプログラミングによる数理的処理そのものや、その結果を用いたインスタレーションを中心に国内外で作品を発表。2016年、カブリ数物連携宇宙研究機構での滞在制作で作品「datum」シリーズの制作に着手、豊田市美術館、札幌国際芸術祭プレイベントで発表。17年、チリの標高約5000mに位置するアルマ望遠鏡での滞在制作を経てシリーズ最新作を制作開始。

Norimichi Hirakawa公式HP
<http://counteraktiv.com>



本人からのコメント

人間は、見たことのないものや、想像したことのないものを作り出せるでしょうか？

めがねと紡ぐ美術展

企画展
江戸時代から現代まで
—「みる」ことの探求

2018年9/15 [土] ~ 11/12 [月]

開館時間 / 10:00~18:30 (展示室への入場は18:00まで)
休館日 / 毎週火曜日
観覧料 / 一般:1,000円、大学生:600円、小中高生300円

めがね、それは見えないものを見るのぞき窓。望遠鏡、顕微鏡、のぞきからくり、だまし絵…。アートとテクノロジーは世界をどう捉え、何をを見せてきたのか？浮世絵から現代アートまで幅広い作品でたどります。

島根県芸術文化センター「グラントワ」内
島根県立石見美術館

